スージー・クアトロ

「キャン・ザ・キャン」「48クラッシュ」などのヒット曲をひっさげて、女性ロック・シーンの先駆者として70年代を駆け抜けたスージー・クアトロが帰ってきた。

取材・文／木村紀子
通訳／中野　嘉久
撮影／中島隆之
協力／H.I.P.大阪、MUSE HALL

サディスティック・ロック・クイーン。そう聞いたとき、あなたの頭には誰が浮かぶだろう。現在の音楽シーンにおいて、そう呼べる類の女性ミュージシャンはなかなか見当らない。時代はマドンナのようなタフな女性も生み出したが、彼女はその強さと同時に意図的なセクシュアリティをも強調することによって「女であることの意味」まで商品化してみせた。それがいいか悪いかは別として、全く違う観点で音楽し続ける女性がここにいる。スージー・クアトロだ。30代以下の方にはピンと来ないかもしれないが、女ことときがロックを、と一部好奇な目で見られがちだった70年代に登場し、そのセクシーさで英米のみならず日本にも旋風を巻き起こしたひとなのだ。今回、去年とひき続きの来日。昔の名前で出ています的故またロックを演り出したかっていうとそうね、何故かしらねぇ（笑）。休んでいるときもピアノやドラムの練習は続けていたんだけど、でもあるとき、ビートルズがTVで歌っているのを見て思ったの『これだ！』ってね」

— 当時は「サディスティック・ロック・クイーン」なんて呼ばれてましたけど、女性だということでプレッシャーを感じたことなんかありますか。

「今でも私はそう呼ばれるのが好きなのよ（笑）。だって私にはいつもロックがあったから。プレッシャーなんて感じなかったわ。何より音楽に熱中していたし、いつでも自分はプロフェッショナルだと自覚して、そういう姿勢をとっていれば大丈夫よ。今の女性ミュージシャンには、私と同じようなタイプはどうもいないようね。でも、中にはいいなと思うひともいるんだけど」

— この20年間で、音楽面での変化はどうですか。

「まず昔より演奏がうまくなったことかしら（笑）。来年にはまた新しいものを皆に見せることができると思う。今度、ライブアルバムと、ニューアルバムを出すつもりなの。私は常に変わってゆくし、変わろうと努力しているわ。変化し続けていきたいの。そうして、また日本に必ず戻ってきたいわ」

現在2児の母。その昔、結婚式を日本で、それも和装で挙げたほどの日本好きの彼女。「日本は服も靴もみーんな小さくて私にぴったりサイズなの」と嬉しそうに笑う、言葉通りの小柄なボディと昔のままの笑顔は健在だった。

感覚で見るとバチが当たりそうな力強いステージは、サラリーマンぽい昔のファンプラス高校生風の新しいファンの盛り上がりで抜群の出来となった。デビュー20周年、楽屋で話を聞く。

— この20年間、振り返ってみてどうですか。

「素晴らしかったといえるでしょうね。デビューしてから20年だけど、私が音楽を演り始めたのが1964年。だから実際には30年も音楽に関わっていることになるの」

— その間、音楽から遠ざかった時期はありましたか。

「妊娠中に4カ月休んだぐらい。それ以外は音楽から片時も離れたことはなかったわ。ライブを演らなくてもミュージカルに挑戦したりTVに出たり、気分転換をしていたの。でも何

SUZI QUATRO

CATCH the CINEMA

から騒ぎ

シェークスピアを、豪華キャストでハリウッドが料理してみれば。

何故、今シェークスピアなのか。ケネス・ブラナーが、愛妻エマ・トンプソン始め、フレッシュな若手から熟年の大スターまでを率いて描く「から騒ぎ」。クラシックの古さをまったく感じさせないどころか、逆に大変フレッシュに仕上がった作品であるといえる。古典ながら、そのストーリーはいつの世も尽きぬ恋の悩み。イタリアのメシーナの町にアラゴン大公ドン・ペドロ（デンゼル・ワシントン）の一行が勝ち戦を終えやって来る。そこでベネディック（ケネス・ブラナー）とベアトリス（エマ・トンプソン）、そしてクローディオ（ロバート・ショーン・レナード）とヒーロー（ケイト・ベッキンセール）という2組のカップルが誕生した。しかしふたつの恋が進行する中、ペドロの腹違いの弟ドン・ジョン（キアヌ・リーブス）が人望のある兄に激しい嫉妬心を燃やし、クローディオたちの結婚を邪魔しようと策略を立てる。かくして、からまった恋の糸をほどくが如く、警察官ドグベリー（マイケル・キートン）が登場する——。奇抜さや意表をつくことにばかりご熱心な現在のアメリカ映画の中では、まるっきり埋もれてしまいそうなオーソドックスな恋物語。しかしながら、シェークスピア劇にはイギリス俳優、という枠をあえて壊してアメリカの名優たちを登場させたところに、非常にケネス・ブラナーのセンスの良さがある。このあっけらかんとした明るさ、そして深刻さの中にも漂うユーモアはいかにもアメリカ的、時代を超えた、とても爽やかなラブ・ストーリーとなっているのである。ブラナー&トンプソンの相変わらずのおしどり夫婦ぶりはともかくとして、「マルコムX」の頃よりも貫禄がついたデンゼル・ワシントンや、意外な冷たい悪人ぶりで、そのイメージのキャパを広げたキアヌ・リーブス。そしてヘン、ただただヘン、のマイケル・キートンの怪演など、見どころがどっちゃり、の娯楽作。今回が4度目の映画化になる「から騒ぎ」だそうだがこの機会にシェークスピア原作の本のページをめくってみるのもいいかもしれない。

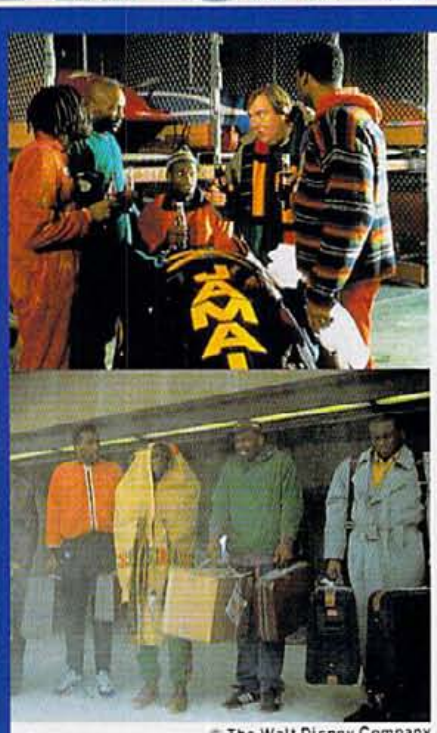
1月22日より朝日シネマで公開。

クール・ランニング

雪を見たことないジャマイカ人が、ボブスレーでオリンピックを目指す。

昨年の10月に全米で公開、スマッシュ・ヒットを記録したおもしろ映画がやってくる。オリンピックを舞台にしたアスリートの物語「クール・ランニング」である。といっても崖なるスポ根ストーリーかと思ったら、こりゃ大間違い。ジャマイカに住む愉快なジャマイカ人が、なんとボブスレーのチームを結成。身の程知らずにもオリンピックを夢見て猛練習に励むのだが、常夏の国から来た彼ら、実は雪なんぞみたこともないのだった！落ちぶれた元オリンピックの選手コーチと出会い、さまざまな困難に打ち勝ちながら、カルガリー冬期オリンピックに挑戦する4人はジャマイカ初のボブスレーチームとして世界的ヒーローとなってゆく。なんとまぁハチャメチャなストーリーだが、これが1988年度オリンピックで起こった実話だというのだから驚く。出演は「モ・ベター・ブルース」のダグ・E・ダグ、「ホーム・アローン」「スプラッシュ」のジョン・キャンディ他。音楽もこれまたコキゲンのジミー・クリフ、ウィリング・ソウルズなど聴きどころがスラリ揃っている。ラストは、大きな感動があなたを包むだろう。笑いたっぷり、涙も少し、とツボをおさえたスポーツ・コメディなのだ。

2月中旬、東宝洋画系にて公開。



© The Walt Disney Company

INTERVIEW

取材・文／早川加奈子

小林靖宏

アコーディオンのギリギリのお洒落感を満載。

グローバルに高評判のアコーディオン・プレイヤー小林靖宏。彼の最新作「33GIRL」は、アンビエント・ハウス、クラシック、ラップ、ネオアコ風などの音が極端だが、同じベクトルを持って並んだアルバム。押し付けではないお洒落感覚でアコーディオンの魅力が味わえるという今作について小林氏にインタビュー。

ー　タイトルには33回転という意味があるとか。アナログへの拘りが？

「アナログは素敵ですよね。アコーディオンって楽器自体すごくギリギリっていうか使い方次第でそれこそ演歌になったり、ものすごくお洒落になりますよね。今回やりたかったのは正にその辺り。スレスレのお洒落感というか格好悪くなる一歩手前のモノばかりなんです。実は1st の頃からそういうとこに拘ってるんですが、いわゆるラテンとかフォルクローレとかに聴こえてるんだけど、そこまでいってないお洒落感を楽しんでるところ、を是非聴いてもらいたい。

ー　「風のナヴガトーレ」にVO参加してたフレンチ・ネオアコのカヒミ・カリィちゃんが今回⑥で小林さんとセルジュ・ゲンスブール&シャルロット状態でデュエット！

「パネッサ・パラディでもいいですが（笑）。彼女を巡る人脈や世界が結構好きなんです。小山田君とかピチカートとかオリジナル・ラブの連中とか。結構お互いのアルバムに参加し合ったりしてるんですけど、彼らのスレスレのお洒落なカンジ、その辺の感性にお互いに集まってくっていうかね。

でコレは彼女をイメージして曲を書いたし」

ー　彼女的なイメージに思い入れが？

「例えばコレをフランス人が聴いたらどう思うかってのに興味あるよね。フランスではウィスパーVOってのはもう使い古されててお洒落でもなんでもない。TOO・MUCHっていうか、でもそこがスレスレというか「このアルバム全部の曲がそういう方向を向いてるわけ。ジャンル的にはものすごい目茶苦茶に幅広いし色んな場所にいる。でも見てる方向は皆んな同じという」

ー　今回アコーディオンが脇役的な部分も多くて、かつギリギリの格好良さを出す、とは意味深だな、と。

「明らかに今回はアコーディオン・レベルが音量的に低いよね。でも必ずしもメロディやアコーディオンを強調する必要はない、とずっと思ってってね。⑪でアコーディオンにディストーションかけたり新しい試みもしてるけどそれを前面に出すのは格好悪いからね」

ー　今作におけるアコーディオンは小津映画における笠智衆の如く、脇役でもものすごい存在感、というような？

ー　「（笑）。正にそうかもしれないですね。それわかり易いですよね（笑）」

協力／アトリエダンカン、東芝EMI
「33GIRL」小林靖宏／3,000円（税込）／東芝EMI

高浪敬太郎

歌うコトに撤したソロ、テクノなサントラ集！

ピチカート・ファイブの高浪敬太郎が初のソロアルバム「SO SO…」を発表。ソフィスティケイトされたアダルトなラヴ・ソングが詰まったポップなこのアルバムでは高浪氏の切ないVOが堪能できるのだ。また、映画音楽をテクノでアレンジした「シネ・テクノ」「モア・シネ・テクノ」というカバー集もプロデュース。故フェリーニ作品や「黄金の七人」シリーズ他高浪氏他5人のアレンジによってカバー（とりわけ「ジョーズ」は傑作！）されている。初のソロ、カバー集について、高浪氏に直撃。

ー　初のソロでは"自分の声をコントロールすることで自分を開放する"というテーマがあったそうですが。

「今迄のやり方（作詞、作曲やアレンジ）以外にもっと能動的、プレイヤー的なものでできるものが歌しかなくて。ピチカートでも歌ってましたけど、前面に出て歌うということで普段控え目な私がですね、きっと色んな心の葛藤が確かあったはずなんですけども、自分を開放する、そういう経験をしてみたかったんです」

ー　そこで自己開放して、自分は映画が好きなんだということを確認してサントラのカバーを思い付いた、とか？

「それもあるかもしれないですけど。でもTVやFMの映画に関する仕事の話が偶然続いたのでこれは面白いな、と思ってね。昨今のサントラ・ブームもありますし、どうやらYMOも復活するという情報もチラホラあったのでテクノでやればいいかも、と」

ー　このカバー集の選曲の意図は？

「最近の若い人が好きなサントラってありますよね。例えばピチカートやフリッパーズのファンの好きなちょっとB級っていうか、ハリウッドよりもヨーロッパのもっていうカンジのね。もちろん僕もその辺は好きですけど、そういう最近の傾向を変えたい、というか僕は映画はまずハリウッドがあって、って気がしてて。若い人達はサントラのジャケット買い、しますよね。僕もよくしたんですけど、それをフォローするものがないなと思ってたんですね。サバービアとかがお洒落なモノを紹介して皆んなが買っても誰の何のフォローもない。じゃあ（ブームを）作った自分達でやればいいんじゃないかということになって。サバービア的なモノを広めていった原因の一端ではあると思うんですよね、ピチカートって。その責任もあるんで（笑）もう少し映画寄りの音楽モノ、映画に関する資料とかも充実させられるなら単なるサントラのカバーではないからいいかな、と」

ー　ルグランやバカラックのものが入っていないのはどうしてなんでしょう？

「誰もが知ってるモノがなきゃいけないと思って。『夕陽のガンマン』とか『ジョーズ』とか。ピチカートやサバービアのファンの方がニヤッとしそうなモノも入れたりしてたら結局入らなくて。ま、『テクノ・バカラック』みたいな形で特集すればいいかな、と。でもいわゆるお洒落オシャレしたモノにするには抵抗があったし、ハリウッドものも外せなかったんですよね」

ー　この「シネ・テクノ」はシリーズ化されていくんですよね。

「もう第3弾を考えてまして、日本の映画音楽をテクノで、と。例えばやくざ映画『仁義なき戦い』とか着流しモノ。あれって今聴くともうマカロニ・ウエスタンなんですよ。あと日活ロマンポルノや駅前某っていう喜劇モノもテクノでやりたいなと。それが「ノー・モア・シネ・テクノ」、第4弾が「リターン・オブ・シネ・テクノ」です（笑）」

「シネ・テクノ」／2,500円（税込）／日本コロムビア

「モア・シネ・テクノ」／2,500円（税込）／日本コロムビア

「SO SO・・・・」高浪敬太郎／3,000円（税込）／日本コロムビア

協力／グレイテスト・ヒッツ、日本コロムビア

ラヴ・タンバリンズ

ライヴはボディコンで来るパワーで見て欲しい。

ミディアム・テンポのミニアルバム「チェリッシュ・アワ・ラヴ」が噂のラヴ・タンバリンズ。ギターの斎藤幸市とVOのエリを中心とした彼らの最新作「ミッド・ナイト・パレード」は、確信的な愛を歌った前作とは一味違うミニアルバムに仕上がっている。とりわけエリのVOの成長振りに魅了されてしまうのは言うまでもないというカンジだ。ネオアコやフレンチな印象の強かったクルーエル・レコードの今や看板アーティストである彼らと、その愛溢れるサウンドについてVOのエリにインタビュー。

ー 次のミニアルバムはどんな感じ？

「曲調は「チェリッシュ・アワ・ラヴ」路線だけど今回はポジティヴな愛の歌とかはなくて、リゾラバの歌とかね」

ー 1月リリースなのに（笑）。夏好きなんですね。夏好きなのはナゼ？

「レゲエの影響じゃないかな。レゲエはすごい好きだから」

ー その辺は前面に出てないですよね。

「それは私だけで作ってるワケじゃないからね。私のソロの時はやってもいいけど、黒人の音なら何でも好きだし」

ー 音楽にハマったのも黒人音楽？

「ううん。ツェッペリンとかストーンズとかジャニス・ジョプリン。でもそれみると黒人に憧れてる白人てカンジじゃない？で少しつつ黒っぽいモノを聴いてくってカンジでね。そうするとJBが好きになったり。JBよりスライ（ストーン）の方が好きだけど。ビートルズたってもちろん通ったしラモーンズやランナウェイズも聴いたよ」

ー 黒人ぽい英語で歌うのに意外だな。

「それは研究したから。元々英語は話せたけどね。でもすごく簡単なコトしか書けないから愛の歌詞にしたってのも理由としてはある（笑）。でも「チェリッシュ・アワ・ラヴ」と「ラヴ・イズ・ヒア」以上に強烈なのは書けっていわれてもちょっとね」

ー ところでライヴのエリさんのセクシーさにまいっている男性ファン多いね。

「そういう服着るしね。でもせっかく女に生まれたんだしそれを利用しないとね」

ー そんなエリさんに憧れちゃうって女のコも結構いるし。

「皆んなやって欲しいよね。（ライヴには）ボディコンで来てほしいな（笑）。クルーエルのお客さんて私から見るとすごく中性的だし踊る時も大人しいし、案外開放されてない気がする。どうせならもっと楽しんで欲しいよね。普段できない格好してきたりね」

ー クルーエルのコンピレイションでカヒミ・カリィとMCやってますよね。

「今度エリー&カリィってのをするの。私がヒップホップでカヒミちゃんはギター・パンクものの予定。近々クールスプーンのメンバーとプリプロに入るの。お互いの可能性も広がるかもね」

PHOTO／[illegible]

協力／ハルコ、クルーエル・レコード

「ハロー、ヤング（ラバーズ）ラヴ・タンバリンズ」、ミニ・ミニ・ライヴ盤／2,100円（税込）

吉弘千鶴子

ロンドン録音のネオ・ジャズ世代アルバム。

阿川泰子のアレンジなどを手掛けるキーボード・プレイヤー吉弘千鶴子。彼女がロンドンのクラブ・ジャズ・シーンで活躍するミュージシャンとセッションした初のソロアルバム「コンシャス・マインド」をリリース。ロニー・ジョーダン、インコグニードやガリアーノのメンバーなど錚々たる面々が参加した、繊細な彼女らしいサウンドが光る今作についてインタビュー。

ー ジャケットはイアン・スウィフティが手掛けているんですね。

「トーキン・ラウドの作品は彼の仕事ですよね。今回トーキン・ラウドのミュージシャン達とかなりセッションすることになってたし、それだったらってことで。ブルーノートの雰囲気でデザインしてくれて。すごく気に入ってます」

ー ロンドンでの録音はスムーズでした？例えばサックスのスティーヴ・ウィリアムソンてナーバスな方でしょう？

「最初はそう思ったの。でも話すとすごく優しい人だった。見た目とプレイからするとナーバスな感じするけどね。他の人達も皆んな穏やかだった。私にとってはアメリカ人よりもとっつき易かったかもしれない。ただ、マックス・ビズリー（Vib）はすごくハイパーでしたね（笑）。こめかみと鼻の下にタイガーバームを塗って"さぁ演ろう"って（笑）。ロニー・ジョーダンは彼のギターの音同様すごく暖かい人でしたね」

ー ゲスト・ミュージシャンの中でも吉弘さんと最もデイストが近いのはロニーかな？と思っていたんですよ。クラブ的というワケでもオーソドックスなスタイルでもない辺りとか、アコースティックな部分を大切にしてる辺りとかね。

「そうですね。ある意味で最もコミュニケイションがとれたのもロニーなんですね。録音の前に曲を2人で練習したり。ロンドン録音を提案したのはプロデューサーの斎藤ノブさんなんです。私のルーツってアメリカのソウルやロックだったりするし、最初はためらったんだけど、彼らUKのクラブ・シーンで活躍しているミュージシャンもアメリカの音楽を聴いて育ってるんですよね。そしてイギリスの土壌で培ったモノもあってそれが彼らの音楽性を作ってる、と思うと国は違えど私と同じかもしれないって。アメリカだとそのものだけど、ロンドンだと私と同じような立場で音楽をやってるような気がして。結果的にそれは正解でしたね」

ー 彼らに、ある共通の思いを感じた、と？

「うん、それはありましたね。今回はミュージシャンのみでしたけど、DJの方とかも何かの形で一緒にやれば面白いんじゃないかなとも考えてます」

ー 可能性でのMIXもアリかな、と。

「私自身がクラブ・ミュージックをやるんだっていうコトではないんですよね、正直言うと。でもDJの方がいいと思って下されればそういう形でかけてもらえればいいし。彼らの感覚ってすごく面白いと思うし、そういう意味でのコミュニケイションはとっていきたいですね」

ー 近々吉弘さんのライヴがあるそうですが、ライヴ的なSEが入った最後の曲とか聴くと期待しちゃいますね。なるべく二のメンバーでのライヴーと。

「あの曲は最初違うイメージの曲だったんだけど、皆んなで音出してみたらあんなカンジになって、それがすごくロンドンで最初に観た「ストレート・ノー・チェイサー」誌5周年記念のイベントでのライヴの雰囲気と同じだと思ったんです。だからあの曲にはロンドンで体験したクラブのノリはあるんじゃないでしょうか」

協力／エイジアン・プロウ、日本フォノグラム

「コンシャス・マインド」吉弘千鶴子／3,000円（税込）／日本フォノグラム

京都発。地球を考える冒険マガジン GEO(ゲオ)創刊。

人々の雑誌離れが始まったといわれる昨今。トレンドだの、流行だのといった情報提供誌とは全く種を異とする、地球サイズの冒険マガジンが誕生した。その名も「GEO（ゲオ）」。17年前にドイツで創刊され、フランス、スペイン、韓国版と、世界150万人の読者を獲得しているインターナショナルマガジンであり、その日本語版が昨年この京都で11月21日に創刊されたのである。21世紀を目前にして、世界という大きな羅針盤は、今その進路を測りかねているところである。「西暦2020年には、現在生息する生物の33%が失われる」といわれている中、私たちにできることとは一体何なのだろうか。「GEO」は日本で初めて、「地球人としての共通認識を喚起する」雑誌として、さまざまな問題を提議してゆく。都市、人間、歴史、自然科学、動物などあらゆるものの真実の姿を記事で語り、そして世界一流のクオリティを誇る写真で見せてゆく。今、本当の価値観が問われるこの時代に、京都発の地球サイズの雑誌が創刊されたのは、かなり喜ばしいことである。

「インターナショナル ゲオ マガジン」
発行所：株同朋舎出版
毎月21日発行／A4変型判
完全予約・定期購読制・直接郵送制
1年購読（12冊）14,760円
※1冊あたり1,230円
3年購読（36冊）29,520円
※1冊あたり820円
問 株同朋舎出版
☎0120-340-159

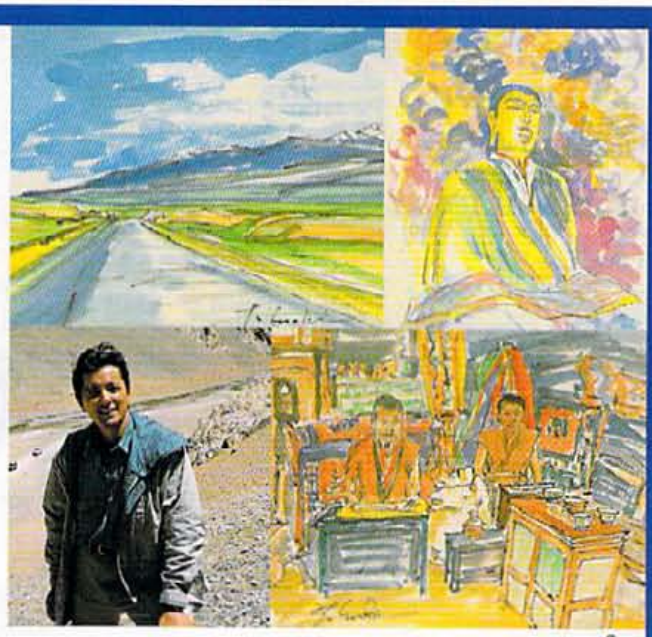
21世紀に向けてかわりつつある、
いや変わるべきである我々が、
手にしたいインターナショナルマガジン。

素顔の役者が旅した、世界。

榎木孝明 画集

ひと、自然、建物、そして空気。ページをめくることに静かな呼吸が感じられる画集が、今、手元にある。榎木孝明の作品集「鷹の道」「チベットの碧」である。榎木孝明といえば人気俳優の、それも極めて二枚目な役者として知られている。が、そんな華やかな一面とはまた別に、仕事を離れ、インド、ネパール、シルクロードなどを毎年訪れるという旅人の顔も持っていることを知らない人は多いと思う。そんなひとにこそ、役者榎木孝明を忘れたところで気持ちを真っ白にして見てほしい。見る者に、激しさよりは爽やかな風を感じさせる水彩画の数々からは、彼の目が、耳が捕えた、自然の息づかいが伝わってくる。そしてそれは、カメラでは決して写すことのできない、彼の絵筆だからこそ可能な表現方法なのである。彼を旅に駆り立てるものは一体何なのか。絵の一枚一枚、そしてその間に書かれた彼のつぶやきとも思える文章のひとつひとつに、その答えが見え隠れする。手にとれば、あなたの旅もここから始まるかもしれない。

「チベットの碧」「鷹の道」現代書林 各3500円



沖縄から飛び出した、熱いラテンの魂を持つバンド、ディアマンテス。男性6人、女性2人のパワフルなそのサウンドが、遂に京都にも上陸する。

ディアマンテス

沖縄のライブハウスが生んだバンド、ディアマンテスをご存じか。「音楽は国境を越える」という言葉の通り、メンバー8人のうち3人がペルー出身の日系人。奏でる音楽も、太陽の光をいっぱい浴びているような明るいラテン・ロックである。結成されてからまだ2年。しかし沖縄では、既に知らぬ人がいないほどの超人気バンドへと成長を遂げた。

リードヴォーカルでバンドの中心人物となるアルベルト城間は、ペルーからUターンした沖縄三世である。十代の頃、中南米日本歌謡コンテストに優勝したことをきっかけに、賞品の航空券を握り締め来日を果たした。夢はただひとつ、演歌歌手になることだったという。それが日本語の発音がうまくいかず挫折。それでも音楽への情熱を捨てきれず、故郷沖縄に戻り、地元の古典音楽を学びながら、ラテンミュージックの弾き語りをしていた。そこで巡り合った音楽仲間たちと組んだバンドがディアマンテスだったのだ。ディアマンテスとはペルー語でダイアモンドの意味である。

彼らがその名を轟かせた地元では有名なライブハウス「パティ」がある沖縄コザ市は、米軍基地があるインターナショナルな土地だ。アメリカ人の他、最近ではメキシコ系やプエルトリコ系の人々も急増し、ラテンロックがますます熱狂とともに迎えられている。そんな土壌で活動するうち、たちまち評判を集めた彼らは、昨年、オリオン・ビールのCMソングに曲が採用されたことから、その人気を不動のものとした。そのCMソングにもなったのが彼らの代表曲「ガンバッテヤンド」。夢を抱いて日本へやって来た外国人労働者の現実と挫折を歌った、厳しいけれども聴いているといつのまにか元気になってしまう、そんなどこか根アカのラテンミュージックである。ガンバッテヤンド――「頑張って」がスペイン語化し、ペルーの日系人のあいだで交わされる言葉だという。そんな歌詞ひとつをとっても、彼らの歌詞には、勇気と、人類愛と、そして人種や言葉が違っても、互いに理解しいたわりあおうというやさしさに満ちている。日頃の不満を音楽で解消してゆくというよりも、おしつけがましくなくナチュラルに「みんな、がんばろうよ」と応援してくれる気楽さが憎いのである。

さてそのディアマンテスが、遂にこの京都へやって来る。まだしばらくは肌寒いこの街に、沖縄発のラテンパワーがシャワーのようにふりかかるのだ。京都のラティーノたちよ、隠れていないで、この夜、熱いリズムをダイレクトに感じてみて欲しい。

★ディアマンテス　京都公演
日程・94年2月23日水
場所・磔磔（四条富小路仏光寺下ル）
時間・開場6:30PM　開演7:00PM
料金・前売3,000円当日3,500円
㊐・パラダイス（中京区六角通り烏丸東入ル大輝六角ビルB1F）
☎・075・256・3393（5:00PM～）

DIAMANTES